

(続紙 1)

京都大学	博士 (経 済 学)	氏名	吉川 晃史
論文題目	企業再生と管理会計- ビジネス・エコシステムからみた経験的研究-		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、企業再生における管理会計の役割について、金融機関をキーストーンとするビジネス・エコシステムの観点から、エスノグラフィックな調査によって得られたデータに基づいて検討した論文である。</p> <p>第1章では、本論文の研究動機がその背景とともに説明されたうえで研究課題が提示されている。日本経済において企業再生が注目されるようになり、中小企業の再生においてはその半数以上において何らかの管理会計技法の導入が図られているが、いかなる管理会計がどのように利用されているのか、企業再生における管理会計の役立ちのメカニズムが明らかにされていないとの指摘が行われている。そのうえで学術的背景として、組織変革と管理会計に関する研究動向の整理が行われるとともに、本論文の研究課題の提示と本論文の構成に関する説明が行われている。そこでは、規範的研究と経験的研究の関連性を整理し、ビジネス・エコシステムの観点から管理会計実践を検討する必要性が主張されている。</p> <p>第2章では、管理会計とマネジメント・コントロール・システム (MCS) の概念的整理が行われたうえで、企業再生におけるMCSに関する先行研究が検討されている。企業再生における管理会計の役割を直接扱った先行研究は極めて限定されており、会計変化研究まで領域を広げ、組織間管理会計研究と関連づける必要があることが示され、本論文の研究課題にとっては、ビジネス・エコシステムの視座から管理会計による組織変化を分析するアプローチが有用であると主張されている。</p> <p>第3章では、第2章の議論をふまえ、本論文の研究課題からエスノグラフィックな研究方法を選択した理由が説明されたうえで、研究方法としてのエスノグラフィックなアプローチの特徴とそれを用いた調査の概要が説明されている。</p> <p>第4章では、主たるケースサイトである金融機関の企業再生プロセスについてその全体像が示されている。まず公式な手順が確認された後に、金融機関と貸出先企業との信頼関係が損なわれた状態から始まる企業再生のプロセスが、再生計画の策定を軸として、会計的に表現された現状認識と将来期待のすりあわせとして進行する姿が描かれる。この整理を通じて、企業再生のプロセスは、失われた信頼会計が再構築されていくプロセスとして捉えられることが示されている。</p> <p>第4章で明らかにされた信頼の再構築プロセスをふまえて、第5章から第7章では、管理会計が、どのように信頼の再構築に影響を与えるのか分析が行われている。第5章では、企業再生に必要な経営者意識の変革がどのように生じるのか、再生計画の策定・実行・見直しを通じた変化に焦点が当てられた分析が行われている。そのなかで、会計的に表現された経営計画の確認・検討を通じて、経営者の楽観主義が修正され、現実的な目標設定が行われるプロセスや、行動計画の遂行状況のモニタリングを通じて経営者の実行意欲が喚起されるプロセスが分析されている。</p> <p>第6章では、金融機関、会計専門家を交えた再生計画の修正を通じて、全社的活動を通じたMCSの変革プロセスが分析されている。再生支援を必要とするような企業の場合、第1次再生計画は成功しない場合が多い。第6章で検討されている再生事例では、第1次再生計画の見直しは、金融機関のイニシアティブによって、経営者だけでなく、多くの従業員を巻き込んで行われている姿が描かれる。従業員を巻き込んで新しい再生計画が策定されることで、具体的で実行可能性が高い計画が策定されると同時に、計画の進捗をモニタリングするための新しい仕組みの構築が必要となる。金融</p>			

機関と企業だけでなく、会計専門家が、再生計画の策定支援や業績評価システムの再構築を支援するコンサルタントとして再生計画の策定を支援することで再生が進んでいる姿が描写されている。

第7章では、再生企業において、事業別、顧客別、製品別といったセグメント別計算が導入される過程と、それによって生じる変化に焦点をあてた分析が行われている。試行錯誤を経て導入されたセグメント別計算をはじめとする管理会計手法が、経営者の学習プロセスを促進する姿が描かれている。また、セグメント別損益計算が、企業内部における意思決定だけでなく、金融機関や保証協会における意思決定にも寄与していることが示されている。

第8章では、第4章から第7章において行われた事例分析をもとに、企業再生プロセスにおいて、管理会計が信頼の再構築にどのように寄与するのかまとめとなる考察が行われている。その上で、本論文の要約と残された研究課題について述べられている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、企業再生における管理会計の役割について、エスノグラフィックな定性的研究方法を用いてデータを収集し、検討した研究である。アクセスが容易ではない企業再生の現場に立ち会い、長期間にわたって体系的にデータを収集し分析を行った意欲的な研究として高く評価できる。具体的には以下の3点が、特に評価される学術的貢献である。

第一に、企業再生における管理会計の役割という実務的にも理論的にも重要なテーマについて、信頼の再構築を鍵概念として、エスノグラフィックな研究方法を用いて体系的にデータを収集することに成功し、そのデータに基づいて独自の知見を得ている点が上げられる。企業再生における管理会計の役割については、データの入手が極めて困難であることを主要な原因として、先行研究がほとんど行われてこなかった。このような領域において、現実に密着してデータを収集するエスノグラフィックなアプローチを活用して、経験的データを収集し、一次データに基づいて分析を行ない興味深い結果を得た点は特記に値する。金融機関・再生企業・会計専門家のコミュニケーションが行われている企業再生の現場に立ち会い、再生計画の策定・実行・見直しといった一連のプロセス全体について詳細なフィールドデータを手入れし、企業再生プロセスを信頼の再構築プロセスとして位置づけたことは、企業再生における管理会計の役割を理解するうえで重要な意味をもつものと評価できる。

第二に、方法論的に複雑であるが、明確な研究フレームワークを提示し、そのフレームワークに従って着実に研究を遂行した点が評価できる。管理会計における伝統的な規範的研究に対して近年批判が行われるなかで、本研究は、規範世界と現実世界の差異を認識したうえで、実務における規範的意識やそれを土台とする規範理論が、企業再生における現実の相互作用にどのような影響を及ぼしているのか経験的事実に基づき明らかにしている。ビジネス・エコシステムでの相互作用が、会計的に表現された再生計画の策定・検討・見直しなどを媒体として進むことで、再生企業の現実が金融機関の期待する規範的な世界に近づく過程を明らかにしたことは、本研究のオリジナルな貢献として評価できる。

第三に、エスノグラフィックな調査を初めとして、一次データを多大なる労力をかけて収集し研究を遂行したこと点である。参与観察だけでも合計239時間費やされており、そのうち17社について34時間分の顧客との面談が行われている。その他にも、再生支援を受けている側の中小企業や、再生支援を担当した会計専門家に対するインタビュー調査など、エスノグラフィックな調査を中心としつつも、多面的かつ体系的にデータを収集したことにより、厚みのある記述が可能となっていると評価できる。

一方、本論文にはいくつかの問題点や今後さらに検討すべき課題も残されている。これらは、以下の3点に要約される。第一に、ビジネス・エコシステムを中心概念として研究が行われているなかで、金融機関の視点が中心となっており、ビジネス・エコシステムを構成する他の主体の視点が相対的に弱い点である。本研究は金融機関の立場から、複数の企業の様々な場面を切り取りながら、企業再生における重要なプロセスの描写を行っている。再生支援を受けている企業側の視点や、会計専門家の視点については今後の研究においてさらなる深掘りが求められる。

第二に、本研究の知見の一般化可能性についての検討も今後の課題である。エスノグラフィックな調査に基づいた本研究は、文脈を非常に限定して、現実世界を詳細に描写することで当事者の視点と理論的な視点の両立を目指して一定の成功を収めている。しかし、理論的な一般化の可能性についての検討は必ずしも十分ではな

く今後の課題となっている。

第三に、企業再生における管理会計の役割について、本研究で検討の対象となった管理会計技法は経営計画やセグメント別損益計算などに限定されている。これはエスノグラフィックな調査に基づいた少数事例に基づく調査であることが反映された結果であるが、管理会計技法の役立ちを管理会計側から体系的に十分には行なえていないという限界につながっている。企業再生における管理会計の役割をさらに広く理解するためには、管理会計手法を体系的かつ理論的に検討していくことが求められる。

しかしながらこれらの問題点と課題は、将来に向けた研究の発展方向性を示唆したものであって、本論文の学術的価値を損なうものではない。よって、本論文は博士(経済学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成26年5月30日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。